

伯爵の釵

泉鏡花

青空文庫

此このもの語がたりの起つた土地は、清きと、美しきと、二筋ふたすじの大おおか

川わ、市しの両端を流れ、真中央まんなかに城の天守てんしゅ尚ほ高く聳そびえ、森黒

く、濠ほり蒼く、国境の山岳は重ち疊ようじようとして、湖を包み、海に沿ひ、

橋と、坂と、辻の柳、蕘いらかなみの浪の町を抱いだいた、北陸の都である。

一ひととせ年、激しい旱魃かんばつのあつた真夏の事。

……と言ふと忽ち、天に可恐おそろしき入道にゆうどう雲湧ぐもわき、地に水論すいろん

の修羅しゆらの巷ちまたの流れたやうに聞えるけれど、決して、そんな、物ぶつ論ろん

騒うな沙汰さたではない。

忤^かる折から、地方巡業の新劇団、女優を主^{しゅ}とした帝都の有名な
大^{おお}一^{いち}座^ざが、此の土地に七^な日^{のか}間^{かん}の興行して、全市の湧くが如
き人氣を博した。

極^{ごく}暑^{しよ}の、早^ひと言^でふのに、たとひ如何^{いか}なる人氣にせよ、湧くの、

煮^にえるのなどは、口にするも暑くるしい。が、——諺^{ことわざ}に、火事の

折から土蔵の焼けるのを防ぐのに、大^{おお}鹽^{だら}に満^{まん}々と水^{みづ}を湛^たへ、

蠟^{ろう}燭^{そく}に灯^ひを点じたのを其^その中に立てて目塗^{めぬり}をすると、壁を透^{とお}し

て煙^{えん}が裡^{うち}へ漲^{みなぎ}つても、火氣を呼ばないで安全だと言ふ。……火を

以て火を制するのださうである。

こゝに女優たちの、近代的情熱の燃ゆるが如き演劇は、恰^{あた}も此
の轍^{てつ}だ、と称^{とな}へて可^いい。雲は焚^やけ、草は萎^しみ、水は涸^かれ、人は喘^{あえ}

ぐ時、一座の劇は宛然さながら、褥じよくねつ熱あまに対する氷の如く、十万の市民に、一劑ざい、清涼の氣を齎もたらして剰余あまあつた。

膚はだの白さも雪なれば、瞳ひとみも露の涼しい中にも、挙こぞつて座中ざちゆうの明星たまたと称たへられた村井紫玉むらいしぎよくが、

「まあ……前刻さつきの、あの、小さな児こは？」

公園の茶店ちやみせに、一人静しずかに憩いこひながら、緋塩瀬ひしおぜの煙管筒きせるづつの結むすびめときか目を解掛とけつゝ、偶ふと思つた。……

鬚まげも女優卷じゆうまきでなく、故わざとつい通りの束髪そくはつで、薄化粧うすげしやうの淡あ々ささ洒つさりした意氣造いきづくり。形容しなに合せて、煙草入たばこいれも、好みで持きつた氣き組ぐみの婀娜あだ。

で、見た処ところは芸妓げいしやの内証ないしよあるき歩行と云ふ風だから、まして女優

の、忍びの出、と言つても可い風采。

また實際、紫玉は此の日は忍びであつた。演劇は昨日樂に成つ

て、座の中には、直ぐに次興行の隣国へ、早く先乗をし

たのが多い。が、地方としては、此まで経歴つた其処彼処より、

観光に価値する名所が夥い、と聞いて、中二日ばかりの休暇を、

紫玉は此の土地に居残つた。そして、旅宿に二人附添つた、

玉野、玉江と云ふ女弟子も連れしないで、一人で密と、……日盛

も慍うした身には苦にならず、町中を見つゝ漫に來た。

惟ふに、太平の世の国の守が、隠れて民間に微行するのは、政

を聞く時より、どんなにか得意であらう。落人の其ならで、そ

よと鳴る風鈴も、人は昼寝の夢にさへ、我名を呼んで、讚美し、

歎賞する、微妙なる音響、と聞えて、其の都度、ハツと隠れ忍んで、微笑みく通ると思へ。

深張の涼傘の影ながら、尚ほ面影は透き、色香は仄めく：
心地すれば、誰憚るともなく自然から俯目に俯向く。謙讓の棲はづれは、倨傲の襟より品を備へて、尋常な姿容は調つて、焼地に焦りつく影も、水で描いたやうに涼しくも清爽であつた。

僅少に畳の縁ばかりの、日影を選んで辿るのも、人は目を睜つて、鯨に乗つて人魚が通ると見たであらう。……素足の白いのが、すらくと黒縹子の上をなれば、溝の流も清水の音信。
で、真先に志したのは、城の櫓と境を接した、三つ二つ、全

国に指を屈すると云ふ、景勝^{けいしょう}の公園であつた。

二

まぶき
公園の入口に、樹林を背戸^{せど}に、蓮池^{はすいけ}を庭に、柳、藤^{ふじ}、桜、山^や吹^{まぶき}など、飛々^{とびとび}に名を呼ばれた茶店^{ちやみせ}がある。

紫玉^{あかたすき}が、いま腰を掛けたのは柳の茶屋と言ふのであつた。が、いろじろ
紅い襷^さで、色白な娘が運んだ、煎茶^{せんちや}と煙草^{たばこ}盆^{ぼん}を袖^{そで}に控へて、
然^さまで嗜^{たしな}むともない、其の、伊達^{だて}に持った煙草^{たばこ}入^{いれ}を手にした時、

「……あれは女の児^こだつたか知ら、其とも男の児^こだつたらうかね

」。

——と思ひ出したのは其である。——

で、きやしやづく華奢造りの黄金煙管で、余り馴なれない、些ちと覚束おぼつかない手つきして、青磁色せいじいろの手つきの瀬戸火鉢せとひばちを探りながら、

「……帽子を……被かぶつて居たとすれば、男の児だらうが、青い鉢は

巻ちまきだつけ。……麦藁むぎわらに巻いた切きれだつたらうか、其ともリボン

か知ら。色は判はつきり然覚えて居るけど、……お待ちよ、——と慫こう

だから。……」

取つて着けたやうな喫のみ方だから、見ると、もの／＼しいまで

に、打うちかたむ傾むいて一口吸ひとくちつて、

「……年とし紀は、然そうさね、七歳ななつか六歳むつつぐらゐな、色の白い上品な、

……男の児にしては些ちと綺麗きれい過ぎるから女の児——だとりボンだ
 ね。——青いリボン。……幼稚ちいさくたつて緋ひと限りもしないわね。
 では、矢張りやつぱ女の児か知ら。それにしては麦藁帽子……尤もつともおさ
 げに結ゆつてれば……だけど、其処そこまでは気が付かない。……」
 大通りは一筋ひとすじだが、道に迷ふのも一興で、其処そこともなく、裏う
 小路らこうじへ紛れ込んで、低い土塀どべいから瓜うり、茄子なすの畠はたけの覗ぞかれる、荒あ
 れ寂さびれた邸やしき町まちを一人で通つて、まるつ切人きりに行合ゆきあはず。白熱
 した日盛ひざかりに、よくも羽が焦げないと思ふ、白い蝶々ちようちようの、不
 意にスツと来て、翻ひらひら々と擦違すれちがふのを、吃驚びつくりした顔をして見
 送つて、そして莞爾にっこり……したり……然そうした時は象牙骨ぞうげぼねの扇
 で一寸ちよつと招いて見たり。……土塀くずれやねの崩屋根を仰いで血のやうな

百^{さるすべり}日^ひ紅^{さきみ}の咲満ちた枝を、涼傘^{ひがさ}の尖^{さき}で擦^{くす}ぐる、と堪^{たま}らない。とぶ
 るくゆさくと行^やるのに、「御免なさい。」と言つて見たり。
 石垣^{いしがき}の草^{くさい}蒸^{いぎれ}に、棄^すててある瓜^{うり}の皮^{かわ}が、化^ばけて脚^{あし}が生えて、む
 くく^{うごきだ}と動^{うご}出しさうなのに、「あれ。」と飛退^{とびの}いたり。取留^{とりと}め
 のないすさびも、此^この女^にの人氣^になれば、話せば逸話^{えきわ}に伝^{つた}へられよ
 う。

低^ひい山^{やま}かと見た、樹立^{こたち}の繁^{さか}つた高^{たか}い公園^{こうえん}の下^{した}へ出ると、坂^{さか}の上^{のぼ}
 り口^{くちやしろ}に社^{やしろ}があつた。

宮^{みや}も大^{おほ}きく、境^{けいだい}内^{ない}も広^{ひろ}かつた。が、砂浜^{すな}に鳥居^{とり}を立てたやう
 で、拜殿^{はいでん}の裏^{うら}崖^{がけ}には鬱^{うつ}々^{うつつ}たる其^{その}の公園^{こうえん}の森^{もり}を負^おひながら、
 広^{ひろ}前^{まえ}は一面^{まそら}、真空^{まそら}なる太陽^{たいやう}に、礫^{こいし}の影^{かげ}一つなく、唯^{ただ}白^{しら}紙^{かみ}を敷^し

詰めた光景ありさまなのが、日射ひざしに、やゝ黄きはんで、渺びようとして、何処どこから散つたか、百日紅の二三点。

……覗くと、静まり返つた正面きざはかたわらの階の傍べにに、紅の手綱たづな、朱の鞍しゆくら置いた、つくりものの自しんめの神馬せきばくが寂寞ひとつとして一頭立つ。横に公園あがへ上る坂は、見透みとおしに成つて居たから、涼傘ひがきのまゝスツと鳥居から抜けると、紫玉の姿は色のまゝ鳥居の柱に映つて通る。……其処そこに屋根囲やねがこいした、大なる石おおいの御手洗みたらしがあつて、青き竜頭りゆうずから湛たたへた水は、且かつすらくと玉を乱して、颯さつと簾すだれに噴ふきあふ溢あふれる。其手水鉢そのちようずばちの周圍まわりに、唯一人ただ……其の稚児ちごが居たのであつた。が、炎天、人影も絶えた折から、父母ちちははの昼寝の夢を拔出ぬけだした、神官この児であらうと紫玉は視みた。ちらく廻りつゝ、廻りつゝ、

彼方あちこち此方する。……

唯と、御手洗は高く、稚児は小さいので、下を伝うてまはりを廻るのが、宛然さながら、石に刻んだ形が、噴溢ふきあふれる水の影に誘はれて、すらく動くやうな。……と視るうちに、稚児は伸上のびあがり、伸上のびあがつては、いたいけな手を空に、すらりと動いて、伸上つては、又空に手を伸ばす。――

紫玉はズツと寄つた。稚児は最もう涼傘ひがさの陰に入つたのである。
「一寸ちよつと……何をして居るの。」

「水が欲しいの。」

と、あどけなく言つた。

あゝ、其それがため足場を取つては、取替とりかへては、手を伸ばす、が

爪^{つま}立つても、青^きい巾^{きん}を巻^まいた、其^{その}の振^ふ分^{わけ}髪^{がみ}、まろが丈^{たけ}は……筒^{つつ}井^い筒^{つつ}其^{その}の半^{なか}にも届^きくまい。

三

其^{その}の御^み手^た洗^{らし}の高^{たか}い縁^{ふち}に乗^のつて居^ゐる柄^{ひし}杓^{やく}を、取^とりたい、と又^{また}稚^ち児^ごが然^そう言^いつた。

紫^{むら}玉^{たま}は思^{おも}はず微^ほ笑^{ほえ}んで、

「あら、恚^こうすれば仔^わ細^けはないよ。」

と、半^{はん}身^{しん}を斜^{かた}めにして、溢^{あふ}れかゝる水^{みづ}の一^{ひと}筋^{すじ}を、玉^{たま}の雫^{しずく}に、颯^{さつ}と散^ちらして、赤^{あか}く燃^もゆるやうな唇^{くち}に請^うけた。ちやうど渴^{のど}いても

居たし、水の潔きよい事を見たのは言ふまでもない。

「ねえ、お前。」

稚児が仰いで、熟じつと紫玉を視みて、

「手を淨きよめる水だもの。」

直接に吻くちづけを接るのは不作法だ、と咎とがめたやうに聞えたのである。

劇壇の女王によおうは、氣色けしきした。

「いやにお茶ちやがつてるよ、生意氣な。」と、軽く其の頭つむりを掌そのひらたで叩たたき放ぽなしに、衝つと広前ひろまえを切れて、坂に出て、見返りもしないで、
扨さてやがて此の茶屋に憩いこつたのであつた。――

今思ふと、手を触れた稚児の頭つむりも、女か、男か、不思議に其の
感覚が残らぬ。氣は涼しかつたが、暑さに、幾干いくちか茫ぼうとしたもの

かも知れない。

「娘さん、町から、此の坂を上る処に、お宮がありますわね。」

「はい。」

「何と言ふ、お社です。」

「浦安神社でございますわ。」と、片手を疊に、娘は行儀正し

く答へた。

「何神様が祭つてあります。」

「お父さん、お父さん。」と娘が、つい傍に、蓮池に向いて、

(じんべ)と言ふ膝ぎりの帷子で、眼鏡の下に内職らしい網を

すいて居る半白の父を呼ぶと、急いで眼鏡を外して、コツンと

水牛の柄を疊んで、台に乗せて、其から向直つて、丁寧

辞儀をして、

「えゝ、浦安様は、浦安かれとの、其の御守護ぢやさうにござりまして。水をばお司りなされます、つかさど竜神りゆうじんと申すことでござります。これの、たゆうさま太夫様にお茶を替へて上げぬかい。」

紫玉は我われし知らず衣紋えもんが締しまつた。……称となへかたは相応そぐはぬにもせよ、拙へたな山水画なかの裡の隠者めいた老人までが、確か自分を知つて居る。

こころづ心着けば、正面神棚かみだなの下には、我が姿、昨夜ゆうべも扮した、劇中女主人公の王妃なる、玉の鳳凰ほうおうの如きが掲げてあつた。

「そして、……」

声ほがらも朗かに、且かつつ慎つつましく、

「竜神だと、女おんながみ神ですか、男おとこがみ神ですか。」

「さ、さ。」と老人は膝ひざを刻んで、恰あたかも此の問を待構まちかまへたやうに、

「其の儀は、とかくに申しまするが、如何いかか、孰いずれとも相あい分わかりませぬ。此の公園のづつと奥に、真ま暗くらな巖窟いわやの中に、一ヶ処し清水みずの湧わく井戸がござります。古こ色しよくの夥おびしい青銅の竜が蟠わだかまつて、井桁いげたに蓋ふたをして居おりまして、金網かなあみを張り、みだりに近づいては成りませぬが、靈沢れいたく金水こんすいと申して、此がために此の市の名が起りましたと申します。此が奥の院と申す事で、えゝ、貴方あなたさま様が御意ぎよいの浦安神社は、其の前まえ殿どのと申す事でござります。御参詣ごまいりを遊あそばしましたか。」

「あ、いゝえ。」と言つたが、すぐ又稚児ちごの事が胸に浮んだ。それなり一時言葉が途絶える。

森々たる日中の樹林、濃く黒く森に包まれて城の天守は前に聳ゆる。茶店の横にも、見上るばかりの槐榎えんぐのきの暗い影が樅楓もみえでを薄く交へて、藍緑らんりよくの流に群青ぐんじようの瀬のある如き、たら／＼上りの径がある。滝かと思ふ蟬時雨せみしぐれ。光る雨、輝く木の葉、此の炎天の下蔭は、恰も稲妻いなずまに籠る穴に似て、もの凄すごいまで寂ひつそり寞した。

木下闇、其の横径よこみちの中途に、空屋かと思ふ、廂ひさしの朽ちた、誰たれも居ない店がある……

四

鎖とぎしてはないものの、奥に人が居て住むかさへ疑はしい。其と

も日が暮れると、白い首でも出て些ちとは客が寄らうも知れぬ。店

一杯いっばいに雛壇ひなだんのやうな台を置いて、最いとど薄暗いのに、三方さんぼうを

黒布くろぬので張廻はりまわした、壇だんの附元つけもとに、流星ながれぼしの髑髏しやれこうべ、乾ひからび

ひとりむした蛾ひとりむしに似たものを、点々並べたのは的まとである。地方の盛場さかりばには

時々見掛みかける、吹矢ふきやの機関からくりとは一目視ひとめみて紫玉にも分つた。

実はまこと——吹矢ふきやも、化ばけものと名のついたので、幽霊の廂合ひあわいの幕

から倒さかさまにぶら下り、見越みこし入道にゆうどうは逃あつちへた穴からヌツと出る。雪

女は拵こしらへの黒堀くろべいに薄うつつり立ち、産女鳥うぶめどりは石地藏いしじぞうと並んで悄しよん

ぼりたらず ひとめこそう ひとつ目小僧の豆腐買は、ながれかんちよう
 乎々む。一ツ目小僧の豆腐買は、流灌頂の野川の縁を、へり
 おおがさ うつむ 大笠を俯向けて、跣足でちよくと巧みに歩行くなど、仕掛け
 ものに成つて居る。……如何はしいが、生霊と札の立つた就な
 かんずく 中 小さな的に吹当てると、床板がぐわらりと転覆つて、ひつくりかえ
 おおまつたけ 大松茸を抱いた緋の禪のおかめが、とんぼ返りをして莞爾と飛にこりと
 びだ 出す、途端に、四方へ引張つた綱が揺れて、鐘と太鼓がしだらで
 いちどき んで一斉にぐわんぐわらん、どんどと鳴つて、其で市が栄えた、いち
 やぶだたみ 店なのであるが、一ツ目小僧のつたひ歩行く波張が切々に、きれぎれ
 敷 畳は打倒れ、飾の石地藏は仰向けに反つて、視た処、もところ
 のあはれなまで寂れて居た。さび

——其の軒の土間に、背後むきに蹲んだ僧形のものがある。のきどまうしろしやがそうぎよう

坊主であらう。墨染の麻の法衣の破れく々な形で、鬱金も最う

ねずみよご

鼠に汚れた布に——すぐ、分つたが、——三味線を一挺、盲目

びわじよい

の琵琶背負に背負つて居る、漂泊ふ門附の類であらう。

何をか働く。人目を避けて、蹲つて、虱を捻るか、瘡を搔くか、

はきだめ

弁当を使ふとも、掃溜を探した干魚の骨を舐るに過ぎまい。

こじき

乞食のやうに薄汚い。

はいざん

紫玉は敗竄した芸人と、荒涼たる見世ものに対して、深い歎

めいき

息を漏らした。且つあはれみ、且つ可忌しがつたのである。

はいふき

灰吹に薄い唾した。

よざか

此の世盛りの、思ひ上れる、美しき女優は、樹の緑蟬の声も滴

かまち おのず

るが如き影に、框も自然から浮いて高い処に、色も濡々と水

ところ

ぬれぬれ

みずぎ

せみ

したた

際^{わだ}立つ、紫陽花^{あじさい}の花の姿を撓^{たわ}わに置きつゝ、翡翠^{ひすい}、紅玉^{ルビー}、真珠
 など、指環を三^みつ四^よつ嵌^はめた白い指をツト挙げて、鬢^{びん}の後毛^{おくれげ}を
 搔^{ついで}いた次手に、白金^{プラチナ}の高彫^{たかぼり}の、翼に金剛石を鏤^{ダイヤ}め、目には血^ス
 ルウドストーン^{くちばし}、嘴^{くちばし}と爪に綠宝玉^{エメラルド}の象嵌^{ぞうがん}した、白く輝く鸚鵡^{おうむ}の釵^{かんざし}―
 隨^{なにがし}玉、―
 ―何^{なにがし}某の伯爵が心を籠^こめた贈^{おくり}ものとして、人は知つて、（伯爵）
 と称^{とな}ふる其の釵を抜いて、脚^{あし}を返して、喫掛^{のみか}けた火皿^{ひざら}の脂^{やに}を浚^{さら}つ
 た。……伊達^{だて}の煙管^{きせる}は、煙を吸ふより、手すさみの科^{しぐさ}が多い慣習^{ならひ}
 である。

三味線背負^{しよ}つた乞食坊主^{ひつか}が、引搔^{ひつか}くやうにもぞくくと肩を揺^ゆる
 と、一^{いち}眼^{がん}ひたと盲^しひた、眇^{めつかち}の青ぶくれの面^{かお}を向けて、恚^こう、引^ひ
 っかたが
 傾^{かた}つて、熟^{じつ}と紫玉の其の状^{さま}を視^みると、肩^{かた}を抽^ぬいた杖^{つえ}の尖^{さき}が、

一度胸へ引込んで、前屈みに、よたりと立つた。

杖を徑に突立てゝ、辿々しく下闇を蠢いて下りて、城の

方へ去るかと思へば、のろく後退をしながら、茶店に向つ

て、吻と、立直つて一息吐く。

紫玉の眉の顰む時、五間ばかり軒を離れた、其処で早や、此方

へぐつたりと叩頭をする。

知らない振して、目をそらして、紫玉が釵に俯向いた。が、濃

い睫毛の重く成るまで、坊主の影は近いのである。

「太夫様。」

ハツと顔を上げると、坊主は既に敷居を越えて、目前の土間に、
両膝を折つて居た。

「……………」

「お願ねがいでござります。……お慈悲じひぢや、お慈悲、お慈悲。」

仮かり初そめに置いた涼傘ひがさが、檻ぼろ褌ころも法衣そでの袖そでに触れさうなので、密そつと手元へ引いて、

「何ですか。」と、坊主は視ないで、茶屋の父娘おやこに目を遣やつた。立つて声を掛けて追はうともせず、父も娘も静しずかに視て居る。

五

少時しばらくすると、

此ひでりの早はやに水は涸かれたが、

碧へきり緑よくの葉の深く繁

れる中なる、緋葉もみじの滝と云ふのに対して、紫玉は蓮はすいけ池みぎわの汀あを歩

行いて居た。こゝに別に滝の四阿あずまやと称ふるのがあつて、八ツ橋やはしを掛け、飛石とびいしを置いて、枝折戸しおりどを鎖とぎさぬのである。

で、滝のある位置は、柳の茶屋からだど、もとの道へ小戻りこもとどする事に成る。紫玉はあの、吹矢ふきやの径みちから公園へ入らないで、引返えしたので、……涼傘ひがさを投遣なげやりに翳かざしながら、袖そでを柔かに、手首をやゝ硬くして、彼処あそこで抜いた白金プラチナの鸚鵡おうむの釵かんざし、其の翼を一ち寸抓よつとつまんで、晃乎きらりとぶら下げて居るのであるが。

仔細は希有けうな、……

坊主が土下座どげざして「お慈悲、お慈悲。」で、お願ねがいと言ふのが金かねでも米でもない。施与ほどこしには違ひなけれど、変な事には「お禁まじな厭いをして遣つかはされい。虫歯うずが疚うずいて堪へ難がたいでな。」と、成程なるほど

左の頬ほおがぷくりとうだばれたのを、堪たえ難がたい状さに掌ひらで抱かへて、

首ひつを引つか傾たむけた同じ方いちがの一い眼がんが白くどろんとして潰つぶれて居る。其

の目からも、ぶよくとした唇からも、汚きたい液なが垂しれさうな塩あんば

梅い。「お慈悲ぢや。」と更に拝んで、「手足すんに五寸釘すんを打たれ

うとても、恚かくまでの苦くる悩しみはございますまいぞ、お情なさぢや、禁まじ厭の

うて遣つかはされ。」で、禁まじ厭ないとは別儀べつぎでない。——其の紫玉が手

にした白プラチナ金の釵さしを、齒いれのうろへ挿さ入いて欲しいのだと言ふ。

「太夫様たゆうさまお手づから。……竜なめくと蛞じ蝸しほど違ちがひまして、生しょうあ

るうちは私わしぢやとて、芸人おひかりの端くれ。太夫様の御光明ごくわうに照あらされ

ますだけでも、此この疾痛いたみは忘わすれませう。」と、はッはッと息を

吐つく。……

既に、何人なんびとであるかを知られて、土に手をつけて太夫様と言

はれたのでは、其の所謂いわゆる禁厭まじないの断り悪さは、金錢の無心むしんをさ

れたのと同じ事——但しただ手から手へ渡すも恐れる……落して釵かんざしを

貸さうとすると、「あゝ、いや、太夫様、お手づから。……貴あなた

女様の膚はだの移香うつりが、脈ひびきの響をお釵から伝へ受けたいのでござり

ます。貴方様あなたさまの御血脈おけちみやく、其が禁厭まじないに成りますので、お手に

釵ひらの鳥をばお持ち遊ばされて、はい、はい、はい。」あん、と口

を開いた中へ、紫玉は止む事やを得ず、手に持添もちそへつつ、釵あしの脚を

挿さし入れた。

喘あえぐわ、舐しゃぶるわ！ 鼻息はないきがむツと掛かる。堪たまらず袖を巻いて唇

を蔽おおひながら、勢いきおひ釵ととともに、やゝ白しろやかな手の伸びるのが、

雪白なる鷺鳥の七宝の瓔珞を掛けた風情なのを、無性
 髯で、チュツパと啜込むやうに、坊主は犬蹲に成つて、
 頗でうけて、どろりと嘗め込む。

唯、紫玉の手には、ぶぶくと響いて、腐れた瓜を突刺す気味
 合。

指環は緑紅の結晶したる玉の如き虹である。眩しかったら
 う。坊主は開いた目も閉ぢて、とした顔色で、しつきりも
 なしに、だらくと涎を垂らす。「あゝ、手がだるい、まだ？」

「いま一息。」――

不思議な光景は、美しき女が、針の尖で怪しき魔を操る、舞台
 に於ける、神秘なる場面にも見えた。茶店の娘と其の父は、感

に堪へた観客の如く、呼吸を殺して固睡を飲んだ。

……「あゝ、お有難や、お有難い。トンと苦悩を忘れました。

お有難い。」と三味線包、がつくりと抜衣紋。で、両掌

を仰向け、低く紫玉の雪の爪尖を頂く真似して、「恁やうに穢

いものなれば、くどくお礼など申して、お身近は却つてお目触

り、御恩は忘れぬぞや。」と胸を捻ぢるやうに杖で立つて、

「お有難や、お有難や。あゝ、苦を忘れて腑が抜けた。もし、太

夫様。」と敷居を跨いで、蹠蹠状に振向いて、「あの、其の

お釵に……」——「え。」と紫玉が鸚鵡を視る時、「齒くさが着

いては居りませぬか。恐縮や。……えひゝ。」とニヤリとして、

「ちやつとお拭きなされませい。」此がために、紫玉は手を掛け

た懐紙ふところがみを、余儀なく一寸逡巡ちよつとためらつた。
同時に、あらぬ方かたに蒼つと面おもてを背そむけた。

六

紫玉は待兼ねたやうに懐紙かいしを重ねて、伯爵、を清めながら、森の径こみちへ行ゆきましたか、坊主は、と訊きいた。父も娘も、へい、と言つて、大方然そうだらうと言ふ。――最もう影もなかつたのである。父娘おやこは唯ただ、紫玉の挙動ふるまいにのみ氣を奪とられて居たらう。……此の辺ある門かどづけ附見つたいなもの、と又訊けば、父親がつひぞ見掛けた事はない。娘が跣足はだしで居ました、と言つたので、旅から紛まぎれ

込んだものか、其も分らぬ。

と、言ふうちにも、紫玉は一寸々々眉を顰めた。抜いて持った釵、鬢摺れに髪に返さうとすると、呀、する毎に、手の撓ふにさへ、得も言はれない、異な、変な、悪臭い、堪らない、臭氣がしたのであるから。

城は公園を出る方で、其処にも影がないとすると、吹矢の道を上つたに相違ない。で、後へ続くには堪へられぬ。

其処で滝の道を訊いて——此処へ来た。

泉殿に擬へた、飛々の亭の孰れかに、邯鄲の石の手水鉢、名品、と教へられたが、水の音より蟬の声。で、勝手に通抜けの出来る茶屋は、昼寝の半ばらしい。何の座敷も寂寥して

ひとけはい
人氣勢もなかつた。

御齒黒蜻蛉が、鉄漿つけた女房の、微な夢の影らしく、ひら

くの一つ、葉ばかりの燕子花を伝つて飛ぶのが、此のあたり

御殿女中の逍遙した昔の幻を、寂しく描いて、都を出た日、

遠く来た旅を思はせる。

すべて旧藩侯の庭園だ、と言ふにつけても、贈主なる

貴公子の面影さへ浮ぶ、伯爵の鸚鵡を何とせう。

霊廟の土の瘡を落し、秘符の威徳の鬼を追ふやう、立

処に坊主の虫歯を癒したは然ることながら、路々も悪臭さ

の消えないばかりか、口中の臭気は、次第に持つ手を伝つて、

袖にも移りさうに思はれる。

紫玉は、樹の下に涼傘を畳んで、滝を斜めに視つゝ、池の縁に低く居た。

滝は、早に爾く骨なりと雖も、巖には苔蒸し、壺は森を被いで蒼い。然も巖がくれの裏に、どうどうと落ちたぎる水の音の凄く響くのは、大樋を伏せて二重に城の用水を引いた、敵に対する要害で、地下を城の内濠に灌ぐと聞く、戦国の余残ださうである。

紫玉は釵を洗つた。……艶なる女優の心を得た池の面は、萌黄の薄絹の如く波を伸べつゝ拭つて、清めるばかりに見えたのに、取つて黒髪に挿さうとすると、些と離れたくらゐでは、耳の辺へも寄せられぬ。鼻を衝いて、ツンと臭い。

「あ、」と声を立てたほどである。

雫^{しずく}を切ると、雫^{しずく}まで芬^{ぶん}と臭^{にお}ふ。たとへば貴重なる香水の薰^{かおり}の一

滴の散るやうに、洗へば洗ふほど流せば流すほど香^かが広がる。：

…二三度、四五度、繰返すうちに、指にも、手にも、果^はは指環の

緑碧^{りよくへきこうこう}紅黄^{しゅぎよく}の珠玉の数にも、言ひやうのない悪臭^{あくしゅう}が蒸れ掛^か

るやうに思はれたので。……

「えゝ。」

紫玉はスツと立つて、手のはずみで一^{ひと}振振^{ふり}つた。

「ぬしにお成りよ。」

白金^{プラチナ}の羽^{はね}の散る状^{さま}に、ちら／＼と映ると、釵^{かんざし}は滝壺^{たきつぼ}に真^{まつ}

蒼^おな水に沈んで行く。……あはれ、呪^{のろ}はれたる仙禽^{せんきん}よ。卿^{おんみ}は

熱帯の鬱林うつりんに放たれずして、山地の碧潭へきたんに謫たくされたのである。

……ト此の奇異なる珍客を迎ふるか、不可思議の獲えものに競きそふか、
 静しずかなる池の面もに、眠れる魚の如く縦横じゆうおうに横はつた、樹の枝々
 の影は、尾鰭おひれを跳ねて、幾千ともなく、一時に皆揺動ゆれうごいた。

此に悚然ぞつとした状さまに、一度すぼめた袖を、はら／＼と翼の如く
 搏たいたのは、紫玉が、可厭いとわしき移香うつりがを払ふとともに、高貴なる
 鸚鵡を思ひ切つた、安からぬ胸の波動で、尚ほ且なつ翻々はらはらとふるひ
 ながら、衝つと飛退とびのくやうに、滝の下行く棧道さんどうの橋に退いた。

石の反橋そりはしである。巖いわと石の、いづれにも累れる牡丹ぼたんの花の如
 きを、左右に築き上げた、銘めいを石橋しやつきようと言ふ、反橋そりはしの石の真
 中に立つて、吻ほと一息ひといきした紫玉は、此の時、すらりと、脊せも心

も高かつた。

七

明眸めいぼうの左右に樹立こだちが分れて、一條ひとすじの大道だいどう、炎天もとひらの下に展
 けつゝ、日盛ひざかりの町の大路おおじが望まれて、煉瓦造れんがづくりの避雷針、古い
 白壁しらかべ、寺の塔など眺まを擲なる中に、行交ゆきかふ人は点々と蝙蝠こうもりの如
 く、電車は光りながら山椒魚さんしょうおの這はふのに似て居る。

忘れもしない、眼界がんかいの其の突つき当あたりが、昨夜ゆうべまで、我あれば
 こそ、電燭さながらの宛然水晶宮の如く輝いた劇場であつた。

あゝ、一翳いちえいの雲もないのに、緑紫紅みどりやねないの旗の影が、ぱつと空を

蔽^{おお}ふまで、花^{はな}やかに目^{ひるがえ}に翻^{ひるがえ}つた、唯^と見ると颯^{さつ}と近づいて、眉^{まゆ}に近い樹^い々の枝^{いろどり}に色^{いろ}鳥^{いろどり}の種^{いろ}々の影^{かげ}に映^{うつ}つた。

蓋^{けだ}し劇場に向^{むか}つて、高^{たか}く翳^{かげ}した手の指環^{さき}の、玉^{たま}の矜^{ほこり}の幻影^{まぼろし}である。

紫玉^{ひとみ}は、瞳^{ひとみ}を返^{かへ}して、華奢^{きゃしゃ}な指^{さき}を、俯^{うつむ}向^むいて視^みつゝ莞爾^{にっこり}した。

そして、すらくと石^{いし}橋^{きょう}を前方^{むこう}へ渡^{わた}つた。それから、森^{もり}を通^{みど}る、姿^{みどり}は翠^{みどり}に青^{あお}ずむまで、静^{しずか}に落着^{おち}いて見^みえたけれど、一^{ふた}ツ三^みツ重^{かさな}つた不意^{ふいき}の出来事^{できごと}に、心^{こころ}の騒^{さわ}いだのは争^{あらそ}はれない。……涼傘^{ひがさ}を置^{おきわす}忘^{わす}れたもの。……

森^{もり}を高^{たか}く抜^ぬけると、三^{さん}国^{ごく}見^み霽^{はら}しの一面^{いっぺん}の広場^{ひろば}に成^なる。赫^{かつ}と射^い

る日に、手廂てびさしして恁こう視ながむれば、松、桜、梅いろ／＼樹さまの状、枝ふりの振おのおのの、各自名ある神仙しんせんの形を映すのみ。幸いひに可まわし忌い坊主の影は、公園の一木一草ぼくそうをも妨さまたげず。又……人の往来ゆきかふさへ殆ほとんどない。

ひとところ、一処おおいけ、大池があつて、朱塗しゆぬりの船の、漣さざなみに、浮いた汀みぎわに、盛装した妙齡としごろの派手な女が、番つがいの鴛鴦おしどりの宿るやうに目に留とまつた。

真白な顔が、揃そろつて此方こつちを向いたと思ふと。

「あら、お嬢様。」

「お師匠ししやうさーん。」

一人が最もう、空氣草履くうきぞうりの、媚なまめかしい褌つまさば捌はきで駆けて来る、目

鼻は玉江。たまえ……最う一人は玉野たまのであつた。

紫玉は故郷へ歸つた氣がした。

「不思議な處で、ところと言ひたいわね。見ぶつかい。」

「えゝ、觀光団。」

「何を悪戯いたずらをして居るの、お前さんたち。」

と連立つれだつて寄る、汀みぎわに居た玉野の手には、船首みよしへ掛けつゝ棹さおが

あつた。

ふなばたあい

舷は藍、萌黄もえぎの翼で、頭かしらにも尾にも紅べにを塗つた、鷓首げきしゅの船の

やかたづくり

屋形造。玩具おもちゃのやうだが四五人は乗れるであらう。

「お嬢様。おめしなさいませんか。」

聞けば、向う岸の、むら萩はぎいおりに庵の見える、船主ふなぬしの料理屋には

最^もう交^{こう}渉^{しょう}済^{ずみ}で、二人は慰^{なぐさ}みに、此^こから漕^{こぎ}出^ださうとする処^{ところ}だつた。……お前^{まへ}さんに漕^こげるかい、と覺^{おぼ}束^{つか}なさ^さに念^{ねん}を押^おすと、浅^あくて棹^{さお}が届^とくのだから仔^こ細^{さい}ない。但^{ただ}、一^{いっ}ヶ所^{ところ}底^{そこ}の知^しれ^れない深^{ふか}水^{みづ}の穴^{あな}がある。竜^{たつ}の口^{くち}と称^{とな}へて、此^こ処^こから下^{した}の滝^{たき}の伏^{ふせ}樋^{どい}に通^とずるよし言^{いい}伝^{つた}へる、……危^{あぶ}くは^なないけれど、其^そ処^こだけ^{だけ}は除^よけたが可^よからう、と、……こ^こんな事^{こと}には氣^き輕^{けい}な玉^{たま}江^えが、つい驅^{かけ}出^だして仕^{こと}わ誼^りを言^いひに行^いつたのに、料^{りょう}理^り屋^やの女^{おんな}中^{なかつ}が、わざわざ出^でて来^きて注^{ちゅう}意^いをした。

「あれ、彼^あ処^{そこ}ですわ。」と玉^{たま}野^のが指^{ゆび}す、大^{おお}池^{いけ}を良^うの方^{ほう}へ寄^よる処^{ところ}に、板^いを浮^うかせて、小^こさな御^ご幣^{へい}が立^たつて居^ゐた。真^ま中^{なかつ}の築^{つき}洲^すに鶴^{つる}ヶ島^{しま}と言^いふのが見^みえて、祠^{ほこら}に竜^{りゅう}神^{じん}を祠^{まつ}ると聞^{きこ}く。……鵜^う首^{しゅ}の

船は、其の島へ志すこころざのであるから、竜の口は近寄らないで済むのであつたが。

「乗らうかね。」

と紫玉は最う棲つまを巻くやうに、爪つまさき尖そろを揃へながら、

「でも何だか。」

「あら、何故なぜですえ。」

「御幣まで立つて警戒をした処ところがあつちやあ、遠くを離れて漕ぐにしても、船頭が船頭だから氣味が悪いもの。」

「否いいえ、あの御幣は、そんなおどかしぢやありませんの。不断ふだんは何にもないんださうですけれど、二三日ふたり前、誰あまごいだか雨乞あまごいだと言つて立てたんださうですの、此ひでりの旱ひでりですから。」

八

岸をトンと盪おすと、屋形船やかたぶねは軽く出た。おや、房州で生れた
 かと思ふほど、玉野は思つたより巧たくみに棹さおさす。大池おおいけは静しずである。
 舳ふなの朱欄しゅらん干かんに、指を組んで、頬杖ほおづえついた、紫玉むすひの胡粉ごふんのやう
 な肱ひじの下に、萌黄もえぎに藍あいを交まじへた鳥の翼の揺ゆるゝのが、其処そこにばか
 り美しい波の立つ風情ふぜいに見えつゝ、船はするゝと滑つて、鶴ヶ
 島をさして滑なめかに浮いて行く。
 然さまでの距離はないが、月夜には柳が煙けむるぐらゐな間まで、島へ
 は棹さうの数百ばかりはあらう。

玉野は上手を遣る。

さす手が五十ばかり進むと、油を敷いたとろりとした静な水も、棹に搔かれて何処ともなしに波紋が起つた、其の所為であらう。

あの底知らずの竜の口とか、日射も其処ばかりはものの朦朧として淀むあたりに、——微との風もない折から、根なしに浮いた板ながら真直に立つて居た白い御幣が、スースーと少しづつ、位置を転へて、夢のやうに一寸二寸づゝ動きはじめた。

凝と、……視るに連れて、次第に、緩く、柔かに、落着いて弧を描きつゝ、其の円い線の合する処で、又スースーと、一寸二寸づゝ動出すのが、何となく池を広く大きく押拡げて、船は遠く、御幣は遙に、不思議に、段々汀を隔るのが心細いやうで、気

も浮うかりと、紫玉は、便た少ない心持こころがした。

「大丈夫かい、彼あ処は渦を巻いて居るやうだがね。」

欄干らんかんに頬杖ほおづえしたまゝ、紫玉は御幣みひを凝視みつめながら言つた。

「詰つまりませんわ、少し渦でも巻かなけりや、余あんましり静ずかで、橋の上を

這はつてゐるやうですもの、」

とお転婆てんばの玉江しやが洒落れでもないらしく、

「玉野さん、船を彼方あつちへ遣やつて見ないか?……」

紫玉が圧おさへて、

「不可いけないよ。」

「否いいえ、何ともありませんわ。それだし、もしか、船に故障が

あつたら、おーいと呼ぶか、手を敲たたけば、すぐに誰か出て来るか

らつて、女中が然^そう言つて居たんですから。」とまた玉江が言ふ。

成^{なるほど}程、島を越した向う岸の萩^{はぎ}の根に、一人乗るほどの小船^{こぶね}が

見える。中洲^{なかつす}の島で、納涼^{すずみ}ながら酒宴をする時、母屋^{おもや}から料理を

運^{かよいぶね}ぶ通船である。

玉野さへ興^{きよう}に乗つたらしく、

「お嬢様、船を少し廻しますわ。」

「だつて、こんな池で助^{たすけぶね}船でも呼んで覧^みたが可い、飛んだお

笑ひ草で末^{まつだい}代までの恥辱ぢやあないか。あれお止^よしよ。」

と言ふのに、——逆について船がくいと廻りかけると、ぎぶり

と波が立つた。其の響きかも知れぬ。小さな御幣の、廻りながら、

遠くへ離れて、小さな浮木^{うき}ほどに成つて居たのが、ツウと浮いて、

板ぐるみ、グイと傾いて、水の面におもにぴたりとついたらと思ふと、罔あまりようかしらの頭、絵ける鬼火ひとだまの如き一条ひとすじの脈みやくが、竜たつの口からむくくちりと湧わいて、水を一文字いちもんじに、射いて疾とく、船に近づくひとと斉しく、波はぎツと鳴つた。

女優の船頭は棹さおを落した。

あれなみがしら、其の波頭なみがしらが忽ち船底ふなぞこを噛かむかとすれば、傾く

船に三人が声を殺した。途端に二三尺じやくあとへ引いて、薄波うすなみを一ひとあお

煽り、其の形に煽るいなや否や、人の立つ如く、空へ大なる魚おおいが飛うお

んだ。

瞬間、島の青柳あおやぎに銀の影が、パツと映さして、魚うおは紫むらさき立だつ

たる鱗うろこを、冴さえた金色こんじきに輝かしつゝ、颯さつと刎はねたのが、翻然ひらりと宙

を躍おどつて、船の中へ堂どうと落ちた。其時そのとき、水がドブンと鳴つた。
 舳みよしと艫ともへ、二人はアツと飛退とびのいた。紫玉は欄干らんかんに縋すがつて身を
 転かはす。

落ちつゝ胴どうの間で、一ひと刎はねると、其のはずみに、船も動
 いた。——見事うおな魚である。

「お嬢様！」

「鯉こい、鯉、あら、鯉だ。」

と玉江が夢中で手を敲たたいた。

此の大おおなる鯉が、尾鰭おひれを曳ひいた、波の引返ひつかえすのが棄すてた棹さおを攫さら
 った。棹はひとりでに底知れずの方へツラ／＼と流れて行く。

九

「……太夫様……太夫様。」

偶と紫玉は、宵闇の森の下道で真暗な大樹巨木の梢を仰

いだ。……思ひ掛けず空から呼掛けたやうに聞えたのである。

「一寸燈を、……」

玉野がぶら下げた料理屋の提灯を留めさせて、さし交す枝を透かしつゝ、——何事と問ふ玉江に、

「誰だか呼んだやうに思ふんだがねえ。」

と言ふ……お師匠さんが、樹の上を視て居るから、

「まあ、そんな処から。」

「然^そうだねえ。」

紫玉は、はじめに納得したらしく、瞳^{ひとみ}をそらす時、髻^{まげ}に手を遣^やつて、釵^{かんざし}に指を触れた。――指を触れた釵は鸚鵡^{おうむ}である。

「此が呼んだのか知ら。」

と微^{ほろよ}醉^いの目元を花^{はな}やかに莞爾^{にっこり}すると、

「あら、お嬢様。」

「可^い厭^やですよ。」

と仰^{ぎょうさん}山^{さん}に二人が怯^{おび}えた。女弟子の驚いたのなぞは構はない

が、読者を怯^{おびやか}しては不可^{いけな}い。滝壺^{たきつぼ}へ投^な沈^げめた同じ白金^{プラチナ}の釵

が、其の日のうちに再び紫玉の黒髪に戻った仔細を言はう。

池で、船の中へ鯉^{とびこ}が飛込^{とびこ}むと、弟子たちが手を拍^うつ、立^{たちさわ}騒^わぐ

声が響いて、最初は女中が小船こぶねで来た。……島へ渡した細綱ほそづなを
 手繰たぐつて、立ちながら操あやつるのだが、馴なれたもので、あとを二一押ふたおし
 みおし、屋形船やかたぶねへ来ると、由よしを聞き、魚うおを視て、「まあ、」と目
 三押みおし、屋形船やかたぶねへ来ると、由よしを聞き、魚うおを視て、「まあ、」と目
 を睜みはつた切きり、慌あわただしく引返ひきかへした。が、間まもあらせず、今度は印半しるしば
 纏んでんを被きた若いものに船を操とらせて、亭主らしい年配としごろな法体ほつたい
 したのが漕こぎつけて、「これはく太夫様たゆうさま。」亭主も逸時いちはやく
 其を知つて居て、恭うやうやしく挨拶あいさつをした。浴衣ゆかたの上だけれど、紋の
 着いた薄羽織うすばおりを引かけて居たが、扱さて、「改めて御祝儀を申述
 べます。目の下二尺三貫目は掛りませう。」とて、……及び腰およこしに
 覗のぞいて魂消たまげて居る若衆わかいしゅに目配めくばせで領うなずせて、「恁かやうな大魚たいぎよ、
 然しかししゅつせうお然も出世魚りぎよと申す鯉魚りぎよの、お船へ飛込みましたと言ふは、類たぐい

希まれな不思議な祥しやう瑞ずい。おめでたう存じまする、皆、太夫様の
 御人徳ごじんとく。続きましては、手前預りあずかまする池なり、所持の屋形やかたぶ
 船ね。烏漣おこがましうござりますが、従つて手前どもも、太夫様の
 福分ふくぶん、徳分とくぶん、未曾有みぞうの御人氣ごにんきの、はや幾分かおこぼれを頂ちやう
 戴だいいたしたも同じ儀で、恁かやうな心嬉しい事はござりませぬ。
 尚ほ恁かくの通りの早魃かんぼつ、市内は素もとより近郷隣きんごうりんごく国、唯炎の中ただ
 に悶もだえまする時、希有けうの大魚たいぎよの躍おどりましたは、甘露かんろ、法雨ほううやが
 て、禽獸きんじゆう草木そうもくに到るまでも、雨に蘇よみがえ生りまする前表ぜんびやう
 かとも存じまする。三宝さんぼうの利益りやく、四方しほうの大慶たいけい。太夫様にお祝
 儀を申上げ、われらとても心祝こころいわひに、此の鯉魚こいを肴さかなに、祝う
 て一献こん、心ばかりの粗酒そしゆを差上げたう存じまする。先づ風情ふぜいはな

くとも、あの島影しまかげにお船を繋つなぎ、涼しく水ものをさしあげて、

やがてお席を母屋おもやの方へ移しませう。」で、辞退も会釈もさせず、

紋着もんつきの法然頭ほうねんあたまは、最もう屋形船の方へ腰を据すゑた。

若わかいしゆしゆ 衆しゆに取寄せさせた、調度を控へて、島の柳に纏もやつた頃は、

然そうでもない、汀みぎわの人立を遮るためと、用意の紫の幕を垂れた。

「神慮しんりよの鯉魚りぎよ、等閑なござりにはいたしますまい。略儀ながら不束ふつつか

な田舎料理の庖丁をお目に掛けまする。」と、ひたりと直つて真ま

魚箸なばしを構へた。

——釵かんざしは鯉の腹を光つて出た。——竜宮へ往來おうらいした釵の玉の鸚お

鵒うむである。

「太夫様——太夫様。」

ものを言はうも知れない。――

とばかりで、ふたこえ一声聞いたやうに思つただけで、何の氣勢けはいもし

ない。

風も囁ささやかず、公園の暗夜やみよは寂さびしかった。

「太夫様。」

「太夫様。」

うつかり釵を、又おさへて、

「可厭いやだ、今度はお前さんたちかい。」

——水のすぐれおぼ覚ゆるは、

せいてんじく西天竺の白鷺池、はくろち

じんじやうきよゆうにすみわたる、

こんめいち昆明池の水の色、

ゆくすえひさ行末久しく清むとかや。す

「お待ち。」

紫玉は耳を澄すました。道の露つゆし芝、

ゝと音する流ながれの底に、聞きも知らぬ

きよくすい曲水の汀みぎわにして、さら／

調子に合せて、微かすかうたに唄ふ声がする。

「——坊さんではないか知ら……」

紫玉は胸が轟とどろいた。

あの漂^{さすらい}白の芸人は、鯉魚^{りぎよ}の神秘を視^みた紫玉の身には、最早^{もは}や、うみ汁^{しる}の如く、唾^{つば}涎^{よだれ}の臭い乞食坊主のみではなかつたのである。「……あの、三味線は、」

夜陰^{やいん}のこんな場所で、もしや、と思ふ時、搔^{かき}消^きえるやうに音が留^やんで、ひた／＼と小石を潜^{くぐ}つて響く水は、忍^{あし}ぶ登^{おと}音のやうに聞える。

紫玉は立留^{たちど}まつた。

再び、名もきかぬ三味線の音が陰々^{いんいん}として響くと、

——日本^{にっぽん}一^{いち}にて候^{そうろう}ぞと申しける。鎌倉^{かまくら}殿^{どの}こと／＼

しや、何処^{いずこ}にて舞^いひて日本一とは申しけるぞ。梶^{かじ}原^{はら}申

しけるは、一^{ひと}歳^{とせ}百^{ひやく}日^{にち}の早^{ひでり}の候^{そうら}ひけるに、賀^{かも}茂^が川^わ、

桂川、水瀬切れて流れず、筒井の水も絶えて、国土

の悩みにて候ひけるに、――

聞くものは耳を澄まして袖を合せたのである。

――有驗うげんの高僧貴僧百人、神泉苑しんせんえんの池にて、仁王にんおうきよ

經うを講じ奉らば、八大竜王はちだいりゆうおうも慈現納じげんのうじゆ受たれ給ふたま

べし、と申しければ、百人の高僧貴僧しやうを請じ、仁王經を

講ぜられしかども、其驗そのしるしもなかりけり。又或人あるひと申

しけるは、容顔美麗ようがんびれいなる白拍子しらびやうしを、百人めして、――

「御坊様。」

今は疑ふべき心も失せて、御坊様、と呼びつゝ、紫玉が暗あんちゆ

中^うを透^{すか}して、声^{こゑ}する方^{かた}に、縋^{すが}るやうに寄^よると思^{おも}ふと、

「燈^ひを消^けせ。」

と、蕭^さびたが力^{ちから}ある声^{こゑ}して言^いつた。

「提^{ちようちん}灯^{てん}を……」

「は、」と、返^へ事^じと息^{いき}を、はッはッとはずま^{けし}せながら、一度^{いちど}消^け損^こねて、慌^{あわ}ただしげに吹^ふ消^けした。玉野^{たまの}の手^ては震^{ふる}へて居^ゐた。

——百人^{ひゃくにん}の白拍子^{はくぱし}をして舞^まはせられしに、九十九人^{きゅうじゅうにん}舞^まひたりしに、其^{その}驗^{しるし}もなかりけり。静^{しずか}一人^{ひとり}舞^まひたりとても、竜^{りゆう}神^{じん}示^し現^{げん}あるべきか。内侍^{ないし}所^{どころ}に召^めされて、禄^{ろく}おもきものにて候^{こう}にと申^{まう}したりければ、とて人^{ひと}数^{かず}なれば、唯^{ただ}舞^まはせよと仰^{おほ}せ下^{くだ}されければ、静^{しずか}が舞^まひたりけ

るに、しんむしやうの曲と言ふ白拍子を、――

燈を消すと、あたりが却つて朦朧と、薄く鼠色に仄めく

向うに、石の反橋の欄干に、僧形の墨の法衣、灰色に成つて、蹲るか、と視れば欄干に胡坐搔いて唄ふ。

橋は心覚えのある石橋の巖組である。気が着けば、あの、か

くれ滝の音は遠くだうくと鳴つて、風の如くに響くが、掠れる

ほどの糸の音も乱れず、唇を合すばかりの唄も遮られず、嵐の下

の虫の声。が、形は著しいものではない、胸をくしやくと折つ

て、坊主頭を、がく、と俯向けて唄ふので、頸を抽いた転軫に

掛る手つきは、鬼が角を弾くと言はば厳めしい、寧ろ黒猫が居て

顔を洗ふと言ふのに適する。

——なから舞ひたりしに、御輿みこしの嶽たけ、愛宕山あたごやまの方かたより
くろくもたわかいでき
黒雲俄に出来て、洛中らくちゆうにかゝると見えければ、――

と唄ふ。……紫玉は腰を折つて地に低く居て、弟子は、其の背う
しろしやが
後に蹲んだ。

——八大竜王鳴渡りて、稲妻いなずまひらめきしに、諸し
よにん
人目を驚かし、三日の洪水を流し、国土安穩あんおんなりけ
れば、扨さてこそ静まの舞まいに示現ありけるとて、日本一と宣旨せんじ
たまわ
を給りけると、承り候うけたまわうろう。――

時に唄を留やめて黙つた。

「太夫様たゆうさま。」

余り尋常じんじょうな、ものいひだつたが、

「は、」と、呼吸いきをひいて答へた紫玉の、身動みじろぎに、帯がキと擦

れて鳴つたほど、深く身に響いて聞いたのである。

「癩坊主かたぼうずが、ねだり言ごとを肯うけごうて、千金せんきんの釵かんざしを棄てられた。

其の心操こころばえに感じて、些細ささいながら、礼心れいごころに密そと内証ないしようの

事を申す。貴女あなた、雨乞あまごいをなさるが可よい。——天てんの時、地ちの利、

人の和ひと、まさしく時節じせつぢや。——この大池おおいけの中洲なかすの島に、か

りの法壇はふだんを設けて、雨を祈ると触れてな。……袴はかま、練衣ねりぎぬ、烏帽えぼ

子し、狩衣かりぎぬ、白拍子しらびようしの姿が可よからう。衆人しゅうじんめぐり見る中へ、

其の姿をあゝの島の上へ高く踰あらかわし、大空に向つて拝はいをされい。

祭文さいもんにも歌にも及ばぬ。天竜てんりゅう、雲を遣やり、雷らいを放ち、雨を

漲みなぎらすは、明午みようごを過ぎさるて申しやうこくの上刻ふんごうに分毫ふんごうも相違ちがない。国境の山、赤く、黄に、峰嶽みねだけを重ねただて爛れた奥に、白蓮びやくれんの花、玉たまの掌なそこほどに白く聳そびえたのは、四時しじに雪を頂いくまんねんいて幾万年はくさの白山さんぢや。貴女あなた、時を計かぞつて、其の鸚鵡おうむの釵かんざしを抜はいて、山の其方そなたに向むかつて翳かげすを合図あひづに、雲は竜の如く湧わいて出よう。——尚なほ其の上に、可よいか、名を挙げられい。……」

——賢かしこびと人の釣つりを垂れしは、
 巖げんり陵ようらい瀬の河の水。

月影つきかげながらもる夏は、
 山田かの笥けいの水とかや。——……

十一

翌日の午後の公園は、炎天の下に雲よりは早く黒く成つて人が湧いた。わ煉瓦を羽蟻で包んだやうな凄じい群集である。れんがはありすさま

かりに、鎌倉殿として置かう。此の……県に成上なりあがりの豪族、

色好みいろこのの男爵で、面構つらがまえも風采も巨頭公ふうさいもに良似たのが、

劇興しばいこうぎ行のはじめから他たに手を貸さないで紫玉を鼯ひいきした、

既に昨夜もゆうべ或處あるところで一いっしょ所に成る約束があつた。其の間の時間ま

を、紫玉は微行びこうしたのである。が、思ひも掛けない出来事のため

に、大分の隙入ひまいりをしたものの、船に飛んだ鯉こいは、其のよしを言こと

づけて初穂はつほと言ふのを、氷詰めにして、紫玉から鎌倉殿へ使つかいを走

らせたほどなのであつた。――

車の通ずる処ところまでは、最もう自動車が出来て待つて居て、やがて、相あい会かいすると、或ある時間までは附添つきそつて差支さしつかへない女弟子の口から、真ま先つさきに予言者の不思議が漏もれた。

一議に及ばぬ。

其の夜よのうちに、池の島へ足代あしろを組んで、朝は早はや法壇ととのが調つた。無論、略式である。

県社の神官に、故実こじつの詳しいのがあつて、神燈しんとを調へ、供饌ぐせんを捧げた。

島には鎌倉殿の定じようもん紋もんついた帷幕まんまくを引繞ひきめぐらして、威儀を正あまたした夥多の神官が詰めた。紫玉は、さきほどからこゝに控へた

のである。

あの、底知れずの水に浮いた御幣は、やがて壇に登るべき立たてお

女形やまに対して目触りめざわだ、と逸いちはや早く取退とりけさせ、樹立こたちさしいで

て蔭かげある水に、例の鷓首げきしゅの船を泛うかべて、半なかむらさきば紫の幕を絞うぢつた裡

には、鎌倉殿をはじめ、客分として、県の頭官、勲位くんいの人々が、

杯さかずきを置いて籠こもつた。——雨乞あまごいに参ずるのに、杯をめぐらすと言

ふ故実は聞かぬが、しかし事実である。

伶人れいじんの奏楽一順して、ヒユウと簫しょうの音ねの虚空こくうに響く時、柳の

葉にちら／＼と緋はの袴かまがかゝつた。

群集は波を揉もんで動揺なだれを打つた。

あれに真白な足が、と疑ふ、緋の袴は一段、階きざに劃はしられて、二ふ

たすじ 条の紅の霞を曳きつゝ、上紫に下萌黄なる、蝶鳥の刺繍の狩
 衣は、緑に透き、葉に靡いて、柳の中を、するくゝと、容顔美
 麗なる白拍子。紫玉は、色ある月の風情して、一千の花の燈の
 影、百を数ふる雪の供饌に向うて法壇の正面にすらりと立つ。
 花火の中から、天女が斜に流れて出ても、群集は此の時くら
 る驚異の念は起すまい。

えぼし 烏帽子もともに此の装束は、織ものの模範、美術の表
 品、源平時代の参考として、嘗て博覧会にも飾られた、鎌倉殿
 が秘蔵の、いづれ什物であつた。

さ 扱て、遺憾ながら、此の晴の舞台に於て、紫玉のために記すべ
 き振事は更でない。渠は学校出の女優である。

が、姿は天より天降つた妙に艶なる乙女の如く、国を囲める、
 其の赤く黄に爛れたる峰嶽を貫いて、高く柳の間に懸つた。

紫玉は恭しく三たび虚空を拝した。

時に、宮奴の装した白丁の下男が一人、露店の飴屋が張

りさうな、渋の大傘を畳んで肩にかついだのが、法壇の根に

顕れた。——此は怪しからず、天津乙女の威厳と、場面の神聖を

害つて、何うやら華魁の道中じみたし、雨乞には些と行過ぎ

たもののやうだつた。が、何、降るものと極れば、雨具の用意を

するのは賢い。……加ふるに、紫玉が被いだ装束は、貴重なる宝

物であるから、驚破と言はばさし掛けて濡らすまいための、鎌

倉殿の内意であつた。

——然ればこそ、此のくらゐ、注意の役に立つたのはあるまい。

あはれ、身のおき処どころがなく成つて、紫玉の裾すそが法壇に崩れた時、
 「状さまを見ろ。」「や、身を投げろ。」「飛込め。」——わつと群
 集の騒いだ時、……堪たまらぬ、と飛上とびあがつて、紫玉を圧おさへて、生命
 を取留とりとめたのも此の下男で、同時に狩衣かりぎぬを剥はぎ、緋はの袴はかまの紐ひもを
 引解ひきほどいたのも——鎌倉殿のためには敏捷びんしょうな、忠義な奴で——
 ——此の下男である。

雨はもとより、風どころか、余あまりの人出に、大池おおいけには蜻蛉とんぼも飛
 ばなかつた。

十二

時を見、程ほどを計つて、紫玉は始め、実は法壇に立つて、数万の
 群集を足許あしもとに低き波の如く見下しつゝ、昨日通つた坂にさへ蟻
 の伝ふに似て押覆おしかえす人数を望みつゝ、徐に雪の頤あぎとに結んだ紫の
 纓ひもを解いて、結目むすびめを胸に、烏帽子えぼしを背に掛けた。

其から伯爵の釵かんざしを抜いて、意気込んで一振り振ると、……黒髪
 の颯さつと捌さばけたのが烏帽子の金きんに裏透うらすいて、宛然さながら金屏風きんびょうぶに名譽
 の絵師えしの、松風を墨すみで流したやうで、雲も竜も其処そこから湧わくか、
 と視ながめられた。——此だけは工夫した女優しよぎの所作で、手には白
 金ナがヒ首あいくちの如く輝いて、凄艶せいえん比類なき風情ふぜいであつた。

さして其の鸚鵡おうむを空に翳かぎした。

紫玉の睜みはつた瞳めには、確たしかに天際てんさいの僻辺へきへんに、美女の掌てに似た、

白山はくさんは、白く清く映つたのである。

毛筋けすじほどの雲も見えぬ。

雨乞あまごいの雨は、いづれ後刻ごこくの事にして、其のまゝ壇くたを降つたら

ば無事だつたらう。処ところが、遠雷えんらいの音でも聞かすか、暗転くらんに成ら

なければ、舞台に馴なれた女優だけに幕が切れない。紫玉は、しか

し、目前まのあたりぎよ鯉魚しんいの神異を見た、怪しき僧の暗示しんげんと識言しんげんを信じたの

であるから、今にも一片の雲は法衣の袖そでのやうに白山の眉まゆに翻ひるがえる

であらうと信じて、須叟しほしを待つ間まを、法壇ふたまわを二廻り三廻り緋みまわの

袴はかまして輪あるに歩行いた。が、此は鎮守ちんじゆの神巫みこに似て、然しかもなれば、

と言ふ足どりで、少なからず威厳を損じた。

群集の思はんほどはばかも憚られて、腋わきの下に衝つと冷つめたき汗を覚えたのこそ、天人てんにんの五衰ごすいのはじめとも言はう。

氣をかへて屹きつと成つて、もの忘れした後こうけん見はげに烈はげしくきつかけを渡す状さまに、紫玉は虚空こくうに向つて伯爵おうむの鸚鵡おうむを投げた。が、あの玩具おもちゃの竹蜻蛉たけとんぼのやうに、晃々きらきらと高く舞つた。

「大神楽！」
だいかぐら

と喚わめいたのが第一番の半はん 晷じょうで。

一人ひとり口火くちびを切つたから堪たまらない。練馬大根ねりまだいこんと言ふ、おかめと喚わめく。雲の内侍ないじと呼ぶ、雨あめしよぼを踊おどれ、と怒鳴どなる。水の輪りんの拵どつがり、嵐の狂ふ如く、聞きくも堪たまへない讒ざん謗ぼう罵ば詈りは雷いかずちの如く哄どつと

沸く。

鎌倉殿は、

船中に於て嚇怒した。

愛寵せる女優のために

群集の無礼を憤つたのかと思ふと、

——

然うではない。這般、好

色の豪族は、

疾く雨乞の験なしと見て取ると、

日の昨の、短夜

もはや半ばなりし紗の蚊帳の裡を想ひ出した。……

雨乞のためとて、

精進齋させられたのであるから。

……

……

……

……

……

「漕げ。」

紫幕の船は、

矢を射るように島へ走る。

一度、駆下りようとした紫玉の緋裳は、此の船の激しく襲つ

たために、一度引留められたものである。

……

……

と喚く鎌倉殿の、何やら太い声に、最初、はくちよう白丁に豆烏帽子まめえぼしで傘を担いだ宮奴は、島になる幕の下を這つて、ヌイと面つらを出した。

すぐに此奴こいつが法壇へ飛上とびあがつた、其の疾はやさ。

紫玉が最早、と思ひ切つて池に飛ばうとする処ところを、圧おさへて、そして剥はいだ。

女の身としてあられうか。

あの、雪を束ねた白いものの、壇の上にひれ伏した、あはれなつか状さまは、月を祭る供物くもつに似て、非あらず、早魃かんばつの鬼一口おにひとくちの犠牲にえである。

ヒイと声を揚げて弟子が二人、幕の内で、手放しにわつと泣い

た。

赤ら顔の おおにゆうどう 大入道の、首拔きの ゆかた 浴衣の尻を、七のづまで ひき 引め
くつたのが、にが 苦り切つたる顔して、つかくと、きざはし 階を踏んで上つ
た、きんかた 金方 なん 何ぞであらう、芝居もので。

肩を むず 無手と取ると、

「何だ、ざま 状は。小町 こまち や しずか 静ぢやあるめえし、増長をしやがるからだ

。」

手の裏かへす無情さは、足も手もぐたりとした、れつじつ 烈日に裂け
かゝる氷のやうな ねりぎぬ 練絹の、紫玉の、ふくよかな胸を、さかやけ 酒焼の
胸に ひつつか 引 けずね 掴み、毛脛に挟んで、

「立たねえかい。」

十三

「口惜くやしい！」

紫玉は舷ふなばたに縋すがつて身を震はす。——真夜中の月の大池おおいけに、影の沈める樹の中に、しばめる睡蓮すいれんの如く漾ただよひつゝ。

「口惜くやしいねえ。」

車馬しゃばの通行を留とめた場所とて、人目の恥あやに歩行あゆみも成らず、――

――金方の計らひで、――万松亭ばんしょうていと言ふ汀みぎわなる料理店に、とに角引かくひっこも籠こもる事にした。紫玉は唯引被ただひつかついで打伏うちふした。が、金方きんかたは油断せず。弟子たちにも旨むねを含めた。で、次場所つぎばしよの興行か恣ぞくく

ては面白かるまいと、やけ酒を煽^{あお}つて居たが、酔^{えいた}倒れて、其は寝た。

料理店の、あの亭主は、心優^{やさし}いもので、起居^{たちい}にいたはりつ、慰めつ、で、此も注意^{だてまき}はしたらしいが、深更^{しんこう}の然^{しか}も夏の夜^よの戸鎖^{とぎし}浅ければ、伊達卷^{だてまき}の跣足^{はだし}で忍んで出る隙^{すき}は多かつた。

生命^{いのち}の惜^{おし}からぬ身には、操^{あやつ}るまでの造作^{ぞうさ}も要らぬ。小さな通^{かよい}船^{ぶね}は、胸の悩みに、身もだえするまゝに揺動^{ゆりうご}いて、萎^{しお}れつゝ、乱れつゝ、根を絶えた小船の花の面影^{おもかげ}は、昼の空とは世をかへて、皓々^{こうこう}として雫^{しずく}する月の露吸^{つゆ}ふ力もない。

「えゝ、口惜しい。」

乱れがみを^{むし}りつゝ、手で、砕けよ、とハタと舷^{ふなばた}を打つと……

時の間に瘦^やせた指は細く成つて、右の手の四つの指環は明星^{なぞら}に擬^{なぞら}へた金剛石^{ダイヤモンド}のをはじめ、紅玉^{ルビー}も、綠宝^{エメラルド}玉も、スルリと抜けて、きらきらと、薄^{うすくない}紅^{あさみどり}に、浅^{あさみどり}緑^{あさみどり}に皆水に落ちた。

何^どうでもなれ、左を試みに振ると、青^{せいぎよく}玉^{こうぎよく}も、黄^{こうぎよく}玉^{こうぎよく}も、真^ま珠^{たま}もともに、月の美しい影を輪にして沈む、……竜^{たつ}の口^{くち}は、水の輪に舞^まふ処^{ところ}である。

こゝに残るは、名なれば其^{ほこり}を誇^{ほこり}として、指にも髪にも飾^ならなかつた、紫^{むらさき}の玉^{たま}唯一^{ただ}つ。——紫玉^{むらさき}は、中^{なか}高^{たか}な顔^{かほ}に、深く月影に透^{とお}かして差^さ覗^{のぞ}いて、千尋^{ちひろ}の淵^{ふち}の水底^{みなそこ}に、いま落ちた玉の緑に似^にた、門と柱と、欄干^{らんかん}と、あれ、森^{こずえ}の梢^{しらさぎ}の白鷺^{しらさぎ}の影さへ宿^{とど}る、櫓^{やぐら}と、窓^{たかど}と、楼^{ろう}と、美しい住家^{すみか}を視^みた。

「ぬしにも成つて、此、此の田舎のものども。」
 縋^{すが}る波に力あり、しかと引いて水を掴^{つか}んで、池に倒^{さかさま}に身を投じ
 た。爪^{つまさき}尖^さの沈むのが、釵^{かんざし}の鸚鵡^{おうむ}の白く羽^{はね}うつが如く、月光に微^{かすか}
 に光つた。

「御坊様、貴方^{あなた}は？」

「あゝ、山国^{やまぐに}の門附^{かどづけ}芸人、誇れば、魔法つかひと言ひたいが、
 いかな、然^さまでの事もない。昨日^{きのう}から御目^{おめ}に掛けた、あれは手品
 ぢや。」

坊主は、欄干^{まが}に擬^{こけむ}ふ苔蒸した井桁^{いげた}に、破法衣^{やれごろも}の腰を掛けて、
 活けるが如く爛々^{らんらん}として眼^{まなこ}の輝く青銅の竜の蟠^{わだかま}れる、角^{つの}の枝に、

肱^{ひじ}を安らかに笑^えみつゝ言つた。

「私に、何のお怨^{うら}みで？……」

と息せくと、眇^{めづ}の、ふやけた目珠^{めだま}ぐるみ、片^{かた}頬^ほを掌^{たな}でさし蔽^{おほ}うて、

「いや、辺境のものは気が狭い。貴方が余り目覚^{めざ}ましい人氣ゆゑに、恥入るか、もの嫉^{ねた}みをして、前^{まえ}芸^{げい}を一寸遣^{ちよつと}つた。……さて時

に承^{うけたま}はるが太夫^{たゆう}、貴女^{あなた}は其だけの御身分、それだけの芸の力で、

人が雨乞^{あまご}をせよ、と言はば、すぐに優伎^{わざおぎ}の舞台に出て、小町^{こまち}も静^{しず}も勤めるのかな。」

紫玉^いは巖^{いわ}に俯向^{うつむ}いた。

「其で通るか、いや、さて、都は気が広い。——われらの手品は

何^どうぢやらう。」

「えゝ、」

と仰いで顔を視た時、紫玉はゾツと身に沁^しみた、腐れた坊主に不思議な恋を知つたのである。

「貴方なら、貴方なら——何^な故^げ、さすらうておいで遊ばす。」

坊主は両手で顔を^{おさ}へた。

「面^{めん}目^{ぼく}ない、われら、此^こ處^こに、高^{たう}い貴^とい處^{ところ}に恋人がおはしてな、
雲霧^{くもぎり}を隔^へてても、其^おの御^あ足^し許^{もと}は動^{うご}かれぬ。呀^や！」

と、慌^{あわ}しく身^みを退^しると、呆^{あき}れ顔^{かほ}してハツと手を^き拈^ねげて立^たつた。

髪黒く、色雪の如く、^いつ^つく
厳^{えん}しく正^{ただ}しく艶^{えん}に氣高^きき貴^き女^{じよ}の、^つく^ろ
縊^くはぬ
姿^{すがた}したのが、すらりと入^いつた。月^{つき}を頸^{うなじ}に掛^かけつと見^みえたは、真^ま白^{しろ}

な涼傘ひがさであつた。

膝ひざと胸を立てた紫玉を、ちらりと御覧ずると、白しろやかなる手尖てさきを軽く、彼が肩に置いて、

「私わたしを打ぶつたね。——雨と水の世話をしに出て居た時、……」

装よそおいは違ちがつた、が、幻の目にも、面影おもかげは、浦安うらやすの宮みや、石の手ち水鉢ようずばちの稚児ちごに、寸分のかはりはない。

「姫様あなた、貴女は。」

と坊主が言つた。

「白はくさん山へ帰る。」

あゝ、其の剣けんヶ峰みねの雪の池には、竜りゅうじよ女の姫神ひめがみおはします。

「お馬。」

と坊主が呼ぶと、スツと畳たたんで、貴女きじよが地に落した涼傘ひがさは、身み震ふるいをしてむくと起きた。手まさぐり給たまへる緋ふさの総たちまれないは、忽ち紅の手綱たづなに捌さばけて、朱の鞍くらお置いた白の神馬しんめ。

ずつと騎めすのを、轡くつわづな頭ひを曳ひいて、トトトト——と坊主が出

たが、

「纏頭しゅうぎをするぞ。それ、錦にしきを着て行け。」

かなぐり脱ころもいだ法衣ころもを投げると、素裸すはだかの坊主が、馬に、ひたと添こんぺきひ、紺碧いわおそぼだなる巖がけの聳ひすいつ峠はしごを、翡翠びようぼうの階子はしごを乗るやうに、貴女きじよは馬上じよにひらりと飛ぶと、天か、地か、渺びようぼう茫ひろのたる曠野の中をタタタタと蹄ひづめの音響ひびき。

蹄を流れて雲が漲る。みなぎ……

身を投じた紫玉の助かつて居たのは、靈沢れいたくこんすい金水の、巖窟がんくつの奥である。うしろは五十万坪と称となふる練兵場れんぺいじょう。

紫玉が、たゞ沈んだ水底みなそこと思つたのは、天地を静めて、車軸を流す豪雨であつた。――

雨を得た市民が、白身はくしんに破法衣やれごろもした女優の芸の徳に対する新たなる渴仰かつごうの光景ようすが見せたい。

青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成」 泉鏡花」国書刊行会

1991（平成3）年3月25日初版第1刷発行

1995（平成7）年10月9日初版第5刷発行

底本の親本：「泉鏡花全集」岩波書店

1940（昭和15）年発行

初出：「婦女界」

1920（大正9）年1月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2009年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

伯爵の釵

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>